



Newsletter

The University of Tokyo Center for Pacific and American Studies

Vol.12 No.2 March 2012

特集：古矢先生を送る

退任挨拶	
古矢旬	1
熱き心に：古矢先生を送る	
能登路雅子	2
古矢先生とアメリカ研究	
遠藤泰生	2
アメリカ・政治学・歴史学	
酒井哲哉	3
古矢先生へ、感謝と反省の言葉	
矢口祐人	3
古矢先生を送る	
橋川健竜	4

特別寄稿

Ourselves Writ Strange	
Anne Collett	5

研究セミナー参加記

戦争当事国のアジア人女性表象とアメリカの政治・メディア言説	
イェン・エスピリテュ セミナー参加記	
臺丸谷美幸	8
「移動」と「帝国」から描くアメリカ史	
ポール・クレイマー セミナー参加記	
大島由香子	9
Signs of Home: The Paintings and Wartime Diary of Kamekichi Tokita	
バーバラ・ジョンズ セミナー参加記	
野村奈央	9
分裂したままの国家—オバマ政権下での人種と政治	
ロジャース・スミス セミナー参加記	
石川葉菜	11

センタープロジェクトの紹介

2011年度（平成23年度）活動報告	14
--------------------	----

特集：古矢先生を送る

退任挨拶

古矢 旬

早いものでCPASに赴任して5年になる。その間2008年度からは能登路先生の後を受けて、非力を顧みずセンター長を務めさせていただいた。ふりかえてこのわずかな期間に、CPASもアメリカ研究も、さらにはアメリカと世界も大きく変貌した。2010年、大学院総合文化研究科は、ドイツ・ヨーロッパ研究センター（DESK）、人間の安全保障プログラム（HSP）そしてCPASの3つの既存の教育研究センターやプログラムの統合を図り、グローバル地域研究機構（IAGS）を発足させた。その結果、CPASは既存の研究体制、図書館、事務機構には大きな変更を加えることはなかったものの、組織的にはこの新機構の傘下の1センターと位置づけられることとなった。CPASの歴史と伝統に鑑みると、また長くCPASを拠点として研究に従事されてきた他のスタッフの方々から見れば、この組織再編は一見駒場におけるアメリカ研究の地盤沈下、もしくは相対

化と映ったかもしれない。実際その後、IAGSには中東研究センターとアジア研究センターが加わり、地域研究組織としてはさらにグローバルな陣容を充実させつつある。このことが、アメリカ研究の弱体化を招くとするならば、この間の組織変更に少なからず干与してきたわたくしの責任は免れないであろう。

しかし冒頭に書いたように、変わったのは、CPASの組織的位置づけに留まらず、アメリカと世界でもある。CPASがグローバルな複眼的研究組織に編入されたことは、国際政治や世界経済におけるアメリカの一極支配が終焉を迎えつつある「現実」に即応していると思われることはできないであろうか。むろん今のところ、IAGSはその傘下の研究センターを有機的に結びつけた文字通りグローバルな研究体制を構築するにはいたっていない。しかし、アメリカであれ、ヨーロッパであれ、アジアであれ、中東であれ、アフリカであれ、オセアニアであれ、いまやグローバルなヒトやモノやカネの流れと無縁な孤立を享受できる地域も国もほとんどないのが実情ではないだろうか。いずれIAGSが、

グローバリゼーションと地域研究の交錯の中から新しい研究視角を提起する舞台になるだろうことが期待できないだろうか。各地域の歴史と現状とをグローバルな文脈の中で見直すという新しい学問的課題が浮上してきているといえないだろうか。対象であるアメリカが相対化しつつある状況下、アメリカ研究にとってもグローバル化の現状は他人事ではないはずである。アメリカ研究とCPASが、このような新しい課題と真っ向から取り組み、IAGSのグローバル研究を主導するような研究展開を目指すことを心から願っている。

思えば、私がCPASで過ごさせていただいた日々は、偶然にもバラク・オバマの時代（それがまだ続くとして、少なくともその第一期）と重なっていた。アメリカ・デモクラシーの自壊としか見えなかった、ブッシュ政権の自己過信やアメリカ礼賛や単独主義とひきくらべて、オバマの登場はまことに新鮮であった。選挙目当ての宣伝本とは無縁の学問的厚みと思想的深みを感じさせた彼の書籍からアメリカ史・アメリカ政治を学びなおし、彼のいくつもの名演説に感動し

励まされながら、アメリカ・デモクラシーの再生可能性に再び思いをいたした5年間であったようにも思う。CPASでの最初の仕事が『ブッシュからオバマへ』であり、最後の仕事が、ジェームズ・クロッペンバーグの名著『オバマを読む』の翻訳となったことも、そういう思いを強くする一因である。

まさにクロッペンバーグが指摘するように、オバマにとり、アメリカ・デモクラシーの可能性は、あらゆる多様な見解が、それぞれ自らを絶対視することなく、異見に開かれ討論と熟議をとおして最良の（ただし妥協的で暫定的な——したがって再修正に開かれた）決定にいたるプロセスのうちに潜んでいる。そのようなデモクラシー観こそは、非妥協的な党派対立に身動きのとれなくなっているアメリカの現実政治にとってだけではなく、他者の抹殺を当然視する死臭芬々たる現代世界にとっても、活かすべき展望ではないだろうか。とはいえ、オバマもまたこの現実政治や現代世界の子でもある。彼が、自らの信条を放棄し、自己の絶対視に陥り新たな戦争という状況に身を投ずる可能性もなくはない。しかしかりにその時がきたとしても、2008年から翌年にかけてオバマが説得的に提示した、政治的展望自体は依然として時代の再生にとって有効であろうと思われる。

CPASに赴任した直後、この同じニューズレターに私は次のような問題提起を書き留めた。「[グローバリゼーションと多文化主義によって「一国的」アメリカ研究が解体された後の、いわば]『ポスト・ネーション・ステート段階』のアメリカ研究は、『9・11事件』以後のアメリカと世界をどのような枠組みによって理解するのであろうか」と。課題は、5年たった今も、答えを与えていない。今後も、一研究者として同じ課題を問い続けてゆきたい。

最後になるが、お世話になりご迷惑をおかけした、アメリカ研究の同僚の先生方、CPAS運営委員会の先生方、図書館司書の方々、事務の方々、そして辛抱強くつき合ってくれたたくさんの学生諸君に心から感謝申し上げたい。

（ふるや じゅん：グローバル地域研究機構長）

熱き心に：古矢先生を送る

能登路 雅子

古矢先生とは1990年代からアメリカ研究の学会や出版プロジェクトでお付き合いがあったが、幸運にもアメリカ太平洋地域研究センター（CPAS）で短期間ではあったがご一緒させていただくことになった。2005年度から私はセンター長を3年間つとめたが、任期中の主な仕事として、CPAS発足後5年の時点での実績をまとめ、次のステップを展望するための外部評価を行なった。それを踏まえて、センター改組が必要となる2010年に向けて油井大三郎先生の後任者をさがすということも大仕事だった。そして、CPASの運営のみならず、センターを含めたグローバル研究コンソーシアム構築に指導的役割を果たすべき人物として、古矢先生に北大からご無理をお願いすることになった。

こうした組織上のさまざまな要請よりも、先生は駒場でアメリカ研究の教育に取り組むことに積極的な関心を示された。実際は行政の重職と駒場独特の学部前期・後期・大学院の三層にわたる教育との両立は大変なご苦勞であったと思うが、先生はアメリカ研究のスケールを押しひろげる歴史解釈をつうじて、多くの学生に深い影響をあたえられた。

つい先日の1月24日に今学期の1、2年生用の授業「歴史世界論」の最終回を使って、古矢先生の最終講義「アメリカ民主政治の二つの伝統」が行なわれ、駒場の新しい教育棟のホールは履修学生、アメリカ研究専攻の学生、同僚はもちろん、他大学の研究者や出版関係者で埋めつくされた。マッカーシーとオバマという意表をつく組み合わせをとりあげて、民主政治のスタイルにおける二つの潮流を検討しながら現代アメリカ民主政の機能不全を論じることが講義の趣旨であった。グローバル・ヒストリーの文脈でアメリカが置かれた状況を比較検討し、イデオロギーや具体的な争点をめぐる認識枠組みや合意形成のプロセスに着目する姿勢を大統領選挙に向けた現在のアメリカ政治の動向分析にも広げていくお話は、き

わめて刺激的な内容だった。

この講義ではCPASで毎日のように先生に接している司書の方々もお見かけしたが、古矢先生はセンター図書室の今後の方向性の検討に苦慮されつつ、普段からとりわけ司書の方々に細かい配慮をしておられた。2008年度からご退職までセンター長の任に当たられ、2010年4月からは新しいグローバル地域研究機構（IAGS）の初代機構長として活躍されるなかで、スタッフひとりひとり、CPASオーストラリア研究客員教授など周囲の同僚との交流に心を尽くしておられる姿は、豪放磊落で知られる古矢先生の別の面をものごとっていたように思う。

最終講義の晩、渋谷のカラオケで古矢先生は大勢のファンに向かって「さよなら、あなたがた、私は帰ります」と「津軽海峡冬景色」を熱唱された。日本のアメリカ研究の中心的役割を担う先生にはしかし、駒場をいったん去られたあとも、アメリカ学会会長のお仕事も含めて頻りに海峡を渡っていただくことになるだろう。ご尽力に感謝するとともに、今後のますますのご発展をお祈りしたい。

（のとじ まさこ：地域文化研究専攻・教授）

古矢先生とアメリカ研究

遠藤 泰生

ある歴史家によれば、歴史と記憶の境がにじんで区別がつかない、一日の時の流れにたとえれば、黄昏時のような時代がどの人間にもあるという。歴史家以外の人々に語りかけることを好んだ英国人史家エリック・ホブズボームの言葉である。ここでいう「歴史」は、おおかたが記録と化し、偏りの少ない科学的な視点からその意味を考えることが出来るようになった時代をさし、一方の「記憶」は、一人の人間の存在の一部あるいは背景として、いまだにそこに暮らす人々の息づかいが聞こえてくるような時代をさす。そして、そのような「黄昏時のような時代」の意味を把握することほど歴史家にとって難しいことはないとも、ホブズボームは

いうのである (Eric Hobsbawm, *The Age of Empire*, 1987, "Overture")。記憶研究が隆盛する昨今の歴史学の潮流に照らせば印象論に過ぎる議論かもしれない。しかし、古矢先生のお仕事を考えると、歴史と記憶の境に位置する「黄昏時のような時代」という表現がその対象を形容するのにいかにも相応しい気持ちがある。先生のお好きなE. H. カーの言葉ではないのが申し訳ないが、敢えてホブズボームの言葉を引いてみたのはそのような理由からである。

その主著である『アメリカニズム―「普遍国家」のナショナリズム』(東京大学出版会、2002)はもとより、『アメリカ 過去と現在の間』(岩波書店、2004)、そして『ブッシュからオバマへ―アメリカ変革のゆくえ』(岩波書店、2009)までを読めば、現代に生きながらその時代を規定する歴史に深い理解を培い、そのうえで未来を見通そうとする古矢先生の研究態度が明らかとなる。その姿勢は終始揺らぐことがない。それは恩師として仰ぐ斎藤眞先生から教えられた姿勢に過ぎないと古矢先生は謙遜しておっしゃるかもしれない。しかし、現代社会へのみずみずしい批判精神を保ちつつ、北米英領植民地の時代からグローバル化の時代までを俯瞰するそのアメリカ研究は、他の研究者には真似ができない。古矢先生が駒場にいてくださったのは5年余りという短い時間ではあったけれど、自分の生きた時代の記憶を歴史の中で相対化し、その意味をよりひろい世界史の文脈に据え直すことに力を注がれるその姿を傍らで拝見させていただいたことは、先生の著作を幾つ読むよりもよほど勉強になった。政治学者にも歴史学者にも刮目される古矢史学が生み出される現場を生で見られたのである。そのことは、豊かな思い出として私のなかに生き続けるであろう。

古矢先生がアメリカ太平洋地域研究センターを去られるに際しては、同センターを土台にグローバル地域研究機構を2010年4月に立ち上げ、その中にドイツ・ヨーロッパ研究センターやアフリカ地域研究センター他の諸地域研究センターと、持続的開発研究センターほかの人間の安全保障プログラムの諸セ

ンターを招き入れた功績に最大の謝辞を申し上げるのが筋なのかもしれない。けれども、そんなことはどうでもよくて、やはり研究と教育だというのが古矢先生の本意だろう。それ故、行政その他でのご活躍振りを細かく記さない失礼をお許しいただきたい。札幌に戻られ北海道のアメリカ研究を再び推進されることに2012年4月からはなるのかもしれない。けれども、駒場で経験されたセンターでのお仕事を時々思い出し、日本全体のアメリカ研究を牽引するお気持ちをこれからも維持していただきたいと切に願っている。大きな声で自らを励ましながらの駒場での数々のお仕事、本当にありがとうございました。

(えんどう やすお：グローバル地域研究機構・教授)

アメリカ・政治学・歴史学

酒井 哲哉

私が古矢先生に初めてお会いしたのは、1986年に北海道大学法学部に赴任したときだから、もう25年前のことになる。古矢先生は既にそのころから、アメリカ政治史のもっとも囑望される若手研究者として全国に勇名をはせていた。そのせいかこのときも初対面という感じはしなかったが、その代わり、このような才気あふれる先輩と「同僚」として政治史講座を担当することになるのかと思うといささか緊張したことを思いだす。その後私は東京大学教養学部で国際関係論の教員として転出することになったが、縁あって、古矢先生もほどなく、歴史学の教員として地域文化研究専攻・アメリカ太平洋地域研究センターに赴任されることになり、再び、「同僚」として顔を合わせるようになった。「同僚」といっても、古矢先生は初対面のときと同じく、浅学の私には常に一線を画した輝ける先輩であって、「同僚」が括弧付きなのはそのためである。

研究者として駆け出しのころ、私は自分の学問的立脚点についてあれこれ悩んだ。とりわけ、政治学者が歴史学を研究することはどのような方法的前提を

伴うのか、という問題は、分ったようで分らない事柄であった。初学者の常で、このような解決不能な問いを研究会のあとの酒席の場で、先生や先輩に持ち出しては、響きをかっていた。いまの私が同じ問いを若手研究者からされても困るにちがいないが、そのときもあまり明快な答えは得られなかったようにおもう。私の大学院生だった1980年代前半の政治学界では、少しずつ歴史・思想といった人文的要素を払拭した政治学の科学主義化が進行しつつあり、彼らと論争しながら、他方では、極めて職人芸的な実証的「国史学」の研究者とも付き合っていかなければならないという、いささか苦しい立場に私はあった。

そういうなかで、古矢先生は、政治学者でもあり歴史学者でもあるということが見事に両立する模範的事例として屹立していた。私はアメリカ史のことは詳しくないが、古矢先生のアメリカ論は、「アメリカ政治学」を標榜するどの学徒よりも政治学的であると同時に、歴史解釈としても一貫しているように思えた。政治学と歴史学とのなかなか実現しないバランスを見事に一身で体現した事例として、古矢先生は、私にとって意義深い存在であった。そしてこのような政治史学者を歴史部会が招請したことに、駒場の歴史研究の健全さを感じ愉快だった。

4月からは再び札幌で教鞭をとられると伺っている。絵にかいたような団塊の世代の古矢先生は、これからは元気で北の地から私を叱咤激励してくださるだろう。もとより古矢先生の足元にも及ぶべくもないが、ひどくは叱られない程度には努力したいと思う。古矢先生、どうも長い間ありがとうございました。

(さかい てつや：グローバル地域研究機構・教授)

古矢先生へ、感謝と反省の言葉

矢口 祐人

私が古矢先生に抱く深い感謝の気持ちは、すでに別稿(『うずしお』2011年度号)に記したので、ここでは主に

反省の念を書くことをお許し頂きたい。

古矢先生は長く北海道大学で教えられた後、東京大学の駒場キャンパスへ移って来られた。東京に住む研究者の大半は、これをごく自然なことと受け止めたのではないだろうか。札幌から東京へ、北海道大学から東京大学へという移動は、東京（大学）中心主義者には不思議なことではない。

しかし札幌で生まれ育ち、同じく以前北海道大学で教えていた私は、古矢先生が駒場に来られるとは思っていなかった。札幌は居心地の良い街だし、先生はそこにご家族もご自宅もある。何より北海道大学法学部は素晴らしい環境の職場である。いくらお願いしても無理だろう、と考えていた。だから、駒場での仕事をお引き受け下さったと知ったときの驚きと喜びは大きかった。日本のアメリカ研究の第一人者である先生と、同じ職場で働けることを非常に嬉しく感じた。

それにしてもなぜ古矢先生は駒場に来て下さったのだろう。思うに先生は駒場のアメリカ研究に新たなエネルギーを吹き込むつもりでいらしたのではないだろうか。そして、そうすることで、日本のアメリカ研究を変革することを考えておられたのではないだろうか。実際、先生は着任以来、アメリカ太平洋地域研究センターを中心に精力的な研究と教育活動を展開され、駒場のアメリカ研究を牽引するリーダーとして活躍された。会議が延々と続く駒場の日常を嘆きながらも、大切なのは組織保全ではなく、教育と研究であると主張し、それを実践されてこられた。その仕事ぶりに影響を受けた学部生や大学院生は数知れない。

しかし翻って、古矢先生を迎えた駒場のアメリカ研究者は先生の期待に応えたであろうか。先生のように、真剣に研究と教育を実践してきたであろうか。私自身は忙しさを言い訳に、十分な仕事をしてこなかったという後ろめたさがある。駒場の研究を活性化させるために来て下さった先生の後姿を見つめるばかりで、しっかりと追いつく努力を怠ってきた。このことをとても申し訳なく感じている。

古矢先生は『ブッシュからオバマへ』

で、オバマの資質を高く評価する一方、「リーダーとリーダーシップとがいかにか新しくとも、それを迎え入れようとしている現実の政治状況が新しいわけではない」と述べ、「旧態依然たる政治行動と言説が根強く残存」している状況ではリーダーシップに「限界」があると指摘している(226)。

このことはアメリカ社会のみならず、今の駒場のアメリカ研究にもあてはまるのではないだろうか。私たちは古矢先生の指導力に応えるべきであったのに、旧態依然としたやり方に甘え、先生が求める高いレベルの研究と教育をしてこなかった。先生が去られる日が近づくにつれ、私はそのような自責の念にかられている。

今からでも遅くない。古矢先生が私たちに示した教育と研究に取り組む姿勢を模範にし、駒場と日本のアメリカ研究を活性化させる努力をするべきだ。それこそが先生への恩返しになるのではないだろうか。

(やぐち ゆうじん：地域文化研究
専攻・准教授)

古矢先生を送る

橋川 健竜

古矢先生に1年遅れて着任した私は、同じ時期に外から来て、駒場という職場の目まぐるしさを経験しつつCPASを運営したという点で、理論的には先生と共有する部分が少しあることとなります。ですがこの4年間は、そんな比較がいかにおこがましいかを確認することの繰り返しでした。私の場合は非力の悲しさ、業務の多さと複雑さに圧倒され、日々の仕事をひとつ終えるたびに、ただ疲れていました。そんな身にとっては、CPASの運営主任（総務係のようなもの）としてCPAS事務室で先生とよく顔を合わせ、先生のキャンパスへの適応ぶりを近くで見せていただけたことは、大きな経験でした。駒場の複雑さには古矢先生も感心しておられたようですが、先生はそこで携帯電話を取り出しては学内外の各方面と話をされ、研究会やシンポジウムなどCPAS

の活動を組織し、また日常の運営をさらにスムーズに行うための道を探られるのでした。時にもらされた冗談交じりの愚痴ですら、携帯電話による現状打破と前進のためのエネルギーになっていたように見受けられます。そうした交渉のなかから、CPASを中心とするグローバル地域研究機構（IAGS）の立ち上げが実現し、駒場図書館との業務提携も進行しました。オーストラリア研究客員教授の招聘ももう12年連続となり、客員教授の先生方には、多くの学部生・院生が受講して高く評価するような授業をいただいています。こうした組織上の整備と調整は、地味に見えるかもしれないものもありますが、CPASが今後も活動を続け、深めていく上で、じわりと効果を発揮していくはずで、これらを可能にした先生のご判断と粘り強い交渉とに、私たちは深く感謝し続けていこうと思います。

このように行政や組織の仕事をされつつ、先生は『ブッシュからオバマへ』を上梓したのをはじめとして、活発に研究活動を展開してこられました。毎年アメリカとヨーロッパから超一級の研究者を東京に招聘して議論し、本年度末にもクロッペンバーグのオバマ論を翻訳刊行されることが、いかに着実に中身の濃い研究活動歴であるか、言うまでもないでしょう。またCPASにおける研究活動の充実を訴えて、私たちが叱咤し続けてくださったことにも、強い印象を覚えます。CPAS年報にも細かく目を通され、私の書いた書評にまで熱をこめて学問的なコメントを下さったことは、忘れがたい記憶です。私もようやくキャンパスにほんの少しばかり慣れることができ、抜けない疲れが許す範囲でできることを手がけていこうと思う矢先に、先生が退かれるのは残念なことです。ですが駒場を離れても、今後いっそう力強くアメリカ研究を牽引して下さることを信じてやみません。4月以降もお体を大事にされて、札幌から時折CPASに厳しい叱咤を下さいますよう、お願いしたいと思います。先生、この4年間大変お世話になり、本当にありがとうございました。

(はしかわ けんりゅう：グローバル
地域研究機構・准教授)

特別寄稿

Ourselves Writ Strange

Anne Collett

(University of Wollongong/Visiting Professor from Australia, University of Tokyo)

As I consider what it is I most want to say in this brief essay, I realize that it is almost February and, essay marking aside, the winter term of teaching has come to an end. Already, after only four months in Tokyo, it is with some difficulty that I recall the first impressions of a stranger in a strange land; but the sense of achievement when I negotiated my way in, through and out of Shibuya station on my own is still palpable (and faintly ridiculous – I am after all a fully grown adult). On occasion I still feel the thrill of breasting the massive wave of people and swimming my way against the tide without a falter or a bump to the ticket gate. But sometimes when I slap down my PASMO with nonchalance (I'm not a tourist) I feel like a chastened child when the gate rejects me (for I have perhaps become too cocksure and slap too briefly): I am literally shocked out of the smoothness of flow with an abruptness that brings me to a standstill (and causes a pile-up of those in my wake).

Of course I am still a stranger and I cannot afford to become complacent, but it is surprising how quickly, by establishing a routine, I have adapted to strangeness. The strange is now familiar, or maybe I mean, I have become familiar with strangeness. I no longer notice the babble of language I cannot understand or the visual signs of multiple languages I cannot read – that is until I journey outside my routine and am forced once again to recognize

my difference and my vulnerability: the train I am riding into the countryside does not broadcast the station names, the station names on the platforms are in Japanese and no translation is provided; the menu in the restaurant is written in Japanese and the waiters neither speak nor understand English. I am lost. I require assistance, but assistance I have discovered is always forthcoming, often before I have actively sought it, and I am both impressed by and grateful for the sensitivity, the kindness, the graciousness of 'the Japanese'. I am well on my way to creating a national stereotype based on purely personal, local and, it has to be admitted, very limited experience.

Stereotypes are best avoided and yet making sense of the world and my place within it depends upon a process of generalizing from the particular and extrapolating from the personal. I need to establish pattern, create a map – I need to make the strange familiar so that I can position myself on the map and in the pattern. But what I really need is an interactive map, a map that constantly reflects and responds to the changing world and my changing place within it. 'The man who never alters his opinion,' writes the English Romantic poet, William Blake, 'is like stagnant water, & breeds reptiles of the mind'¹, which of course is part of the reason why I came to Japan. This is not to suggest that Australia is a stagnant pond (although crocodiles feature on the list of 'dangerous Australians')

but rather that any environment that becomes too familiar has the effect of stagnant water. Travel allows you to see a world previously only known to you by the accounts of others, from the perspective of personal lived experience – it breaks down stereotypes even as it replaces them with new ones – but at the least the stereotypes are your own! You discover, as remarked by Irish poet, Louis MacNeice, that the 'World is suddener than we fancy it. World is crazier and more of it than we think. Incurably plural.'² As I ride each day on the crowded train to work, the only visible foreigner (being tall, blond and pale-skinned), it strikes me how various the Japanese are – an amazing mix of physical types and facial characteristics that was completely unexpected. Rarely do I see the 'classic' Japanese face (a kind of identikit 'Geisha' face) I had expected. Travel to some degree exposes the gap between the imagined and the real, between the stereotype and the numerous particular; but perhaps more importantly, travel allows us to see ourselves and our own world from a different perspective: the familiar is made strange.

In the last class of the session I asked my lower-level undergraduate students to consider three questions: What had they learnt about Australia? What had they learnt about Japan? and what had they learnt about themselves? One by one they spoke about what they had learnt about Australia – primarily they had learnt about what it might be

like to be a stranger in a strange land (given the multi-ethnic ‘settlement’ of Australia), and for many what they had learnt about Japan was a recognition of difficulties encountered in the past, the present or a possible future in Japan by those marked as different. But to the question of what they had learnt about themselves, none could or would answer – they were either too reserved and the question too personal or it required more time for consideration. With only five minutes to go, I was just about to wrap up, when the only student missing from class rushed in. I asked him the same questions, to which he replied with incredulity marked on his face and in his voice (much to the hilarity of the rest of the class): “What did I learn about *JAPAN*? In *THIS* course?” (a course titled ‘Australia: the Dream and the Reality’). Given a moment to take the question seriously, he responded in much the same way as his fellow students: that is, he had learnt about the origins and the impact of discriminatory attitudes and practices both in Australia and in Japan. This particular student, when asked in the first class to consider what it was that marked him as himself – a question of identity more idiosyncratic than the shaping forces of family, ethnicity and nation that we had been discussing – replied that he liked the Chinese. Choosing to write his final essay on two poems written by Chinese Australians, as much to my surprise 8 of the 10 students did likewise, he concluded with this comment:

I came to feel the importance of ‘culture’. Having many cultures (and of course, many races) in one country creates a very difficult environment. For me, I live in Japan as one Japanese – just one of the vast majority. It is true that I feel some relief for being the majority in a

community (or a country). I have come to know that foreigners find it hard to live in Japan. Not only are there the language problems, but also a lot of cultural problems we Japanese cannot even come up with. I have some Chinese friends and so I decided to talk with them deeply and I want to know how they feel as a foreigner in Japan.

What I find particularly interesting (and yes, gratifying) about this comment, is the evident impact of reading literature in a foreign language and about a foreign culture: such reading not only reveals the expected differences and similarities to oneself and one’s own culture, but it can result in action; that is, the Romantic thesis about the value of imagination as a catalyst for personal and social change is here endorsed and realized. As Percy Bysshe Shelley wrote in his *Defence of Poetry*:

The great secret of morals is love; or a going out of our nature, and an identification of ourselves with the beautiful, which exists in thought, action, or person, not our own. A man, to be greatly good, must imagine intensely and comprehensively; he must put himself in the place of another and of many others; the pains and pleasures of his species must become his own. The great instrument of moral good is the imagination ... Poetry enlarges the circumference of the imagination...³

What might here be considered is not so much Shelley’s claim about the poet’s ability to employ imagination or about the general tendency of poetry to call upon the use of imagination in its readers, but that the ‘poetry’, or

literature, of one’s own culture might be less able to produce an enlargement of ‘the circumference of the imagination’ than that which renders the reader’s image strange to him or herself. Perhaps because I had talked about ‘Asian Australians’, particularly in reference to the infamous White Australia Policy that had been implemented initially to restrict immigration of the Chinese, but ultimately operated to restrict ‘Asian’ entry more broadly, the students had come to recognize themselves as ‘Asian’ – in the words of Australian poet, Judith Wright, they saw themselves ‘writ strange’.⁴ As another student in the class remarked in his final essay:

From this poem, I thought that discrimination was really distressing. I often hear about discrimination like apartheid which white people employ against black people. However, because I have not experienced such kind of discrimination, I think about discrimination, feeling that ‘it does not concern me’. This poem had an effect on me because I am Asian too. That is to say, the thought that if Japanese people had been immigrants to Australia in exchange for Chinese people, Japanese people would be discriminated against now made me think as if I were a Chinese.

The student’s comment struck a chord with my recent reading of a chapter on ‘Literary Culture’ by Toshiko Ellis, written for *The Cambridge Companion to Modern Japanese Culture* (2009). Here she remarks on the ‘one area in Japanese literature that has been left largely unexplored to date’, that being ‘its relationship with other Asian cultures’. ‘Perhaps’, she continues, ‘as Japanese writers move away from the

Japan-West relationship, there will be room for them to look at their culture and history in relation to the cultures and histories of their neighbours⁵.

The situation in Australia is similar in the sense that the creative and critical milieu of Australian literature has also been dominated until relatively recently by (often fraught) relationship with Europe and America; yet Australia sits within the Asia Pacific and its history is entangled with (also often fraught) relationship to its Asian neighbours. The last ten to fifteen years has seen a significant shift in Australian acknowledgement of literary Asia both within and outside its borders (the publication of an anthology of Asian Australian writing edited by Chinese Cambodian Australian author, Alice Pung in 2008⁶ being a significant marker of this shift). In conclusion then, I would return you to my students, and a final observation about Japan, prompted by the reading of a poem by Judith Wright (a fifth generation Australian of Anglo-Celtic origin) and a poem by a recent immigrant, Chinese Australian, Ouyang Yu⁷:

It might be too deep to read the exclusivity from the two poems, but after I read them, I felt the exclusiveness rather than loneliness and nostalgia.

I emphasise the exclusivity again and again in this essay because Japan has to face this exclusivity in order to survive in the global age. The exclusivity

which the two poems imply has linked to my thought that Japan should have not exclusivity but openness.

Take the population problem in Japan, for instance ...

The student goes on to outline why he believes 'openness' rather than a policy and practice of 'exclusivity' and 'exclusion' should be pursued politically, socially and culturally in Japan.

I have employed student observations in this essay in order to demonstrate a number of things, but let it first be said before I enumerate them that I did not coach the students toward these observations – the class was obviously designed to encourage them to consider their 'angle of vision'⁸ but it was only in the final essay question that I asked them to reflect personally upon the literature with which they had been engaging throughout the session. The students' responses demonstrate to me that firstly, literature, and in particular, foreign literature or a literature in which you find yourself 'writ strange' has enormous power to change perceptions and attitudes; that secondly, 'Japanese students' do not conform to the 'Asian education produces students who pass exams parrot fashion but can't think critically' stereotype prevalent in Australia; and that thirdly, no matter how connected you are to 'the world' through the old media of print or the new 'e' media, nothing is a substitute for the real thing – person to person

intellectual and emotional engagement. This third point might seem a bit of a leap, but my experience in the classroom this session made it clear to me that yes, literature enlarges the circumference of the imagination but the classroom community of (foreign) teacher and ten (Japanese) students allowed for the sharing and development of ideas, and the breaking down of stereotypes that would not have otherwise been available. Ninety minutes each week for fourteen weeks with eleven individuals (twelve counting the Teacher's Aid) in a small room is something of a creative hothouse. Here things are thought and said that might not otherwise be thought or said. The opportunity for me to engage with 'the reality' of Japan and 'the Japanese' is something for which I am grateful.

¹ William Blake, 'A Memorable Fancy', *The Marriage of Heaven & Hell*, 1793.

² Louis MacNeice, 'Snow', *Poems*, 1935.

³ Percy Bysshe Shelley, *A Defence of Poetry*, 1840.

⁴ Judith Wright, 'Nigger's Leap, New England', *The Moving Image*, 1946. Wright is speaking in this poem about shared humanity between indigenous ('black') people and invader ('white') people, but it is reference to and belief in a shared humanity generally that I draw on here.

⁵ Toshiko Ellis, Chapter 11 of *The Cambridge Companion to Modern Japanese Culture*, ed. Yoshio Sugimoto, Cambridge: Cambridge University Press, 2009, pp.199-215.

⁶ *Growing up Asian in Australia*, ed. Alice Pung, Collingwood, Vic: Black Inc., 2008.

⁷ The poems are 'Alien' by Ouyang Yu (from *Moon Over Melbourne*, 1995) and 'Child and Wattle Tree' by Judith Wright (from *Woman to Man*, 1949).

⁸ The phrase is Virginia Woolf's.

研究セミナー参加記

戦争当事国のアジア人女性表象とアメリカの政治・メディア言説

イェン・エスピリテュ セミナー参加記
臺丸谷 美幸



2011年6月21日CPASセミナーにて

2011年6月21日、イェン・レ・エスピリテュ (Yen Le Espiritu) カリフォルニア大学サンディエゴ校エスニック・スタディーズ学科教授により、「対テロ戦争に関するアジア系アメリカ人フェミニスト・クリティーク」(原題: "Asian American Feminist Critique of the War on Terror")と題する研究会が行われた。社会学を専門とし、ジェンダー研究、アジア系アメリカ人研究における先駆的な研究者の一人である教授は、「戦争とフェミニズム」という壮大な論題を考える上で鍵となる議論を提起し、メディアや政治における言説構築でのアジア人女性のジェンダー表象の巧みな利用が、アメリカの軍事・外交政策を正当化する機能を果たすという問題を浮かびあがらせた。

メディアが人権問題を語る際にアジア人女性が「過剰に」表象されることを、教授は「超可視化ⁱ」("hyper-visibility")という語を用いて説明した。アフガニスタン人女性の同国選挙への参加を伝える2004年10月の記事と、ローラ・ブッシュ大統領夫人による同年の演説の事例を用いて、アフガニスタン人女性のメディア表象と米軍介入の正当化の関係性のレトリックを解説した。また、2006年のジョージ・W・ブッシュ大統領の演説で用いられた「専制 (tyranny) と自由 (freedom)」のレトリック

(アメリカを「善」タリバンを「悪」として二項対立的に語ること)にも、女性の表象が用いられると指摘した。9・11以降のアメリカの軍事介入は、「タリバンという家父長制に苦しめられていた現地女性がアメリカによって救済された」という言説を生み出すことにより、「アジア人女性の民主的解放」と直接結びつけられて正当化されたのである。しかし、アフガニスタン人女性の困窮はタリバン政権の支配のみに起因するものでなく、長いコロニアリズム (colonialism) の歴史から考えるべきである。イギリスとソビエトの占領、また冷戦構造下のアメリカCIAによるテロ「支援」が背景にある。この歴史的文脈とアジア人女性表象、現代アメリカのグローバル超権力 (global superpower)、グローバル経済秩序 (global economic order) を併せて考察すべきであると述べた。

次に教授は、アメリカ人女性がアジア人女性の問題を通して「グローバル・アクティビスト/フェミニスト」と自認することがいかに可能となるかという点を取り上げ、特に一部のフェミニスト団体がアフガニスタンへの軍事介入を「アジア人女性の民主的解放」と位置づけ支持した事を問題化した。他方、9・11直後、アメリカの新聞上では消防士や、有名な政治家、兵士たちなど男性の表象が多く、「超可視化」("hyper-visible")され、アメリカ人女性は姿を消すか、泣き叫ぶ母や娘として表象された。また、リサ・ヨネヤマ (Risa Yoneyama) の研究ⁱⁱに触れ、占領期日本人女性の表象が、第二次世界大戦を「良き戦争」として記憶するため利用されたと指摘した。米国の軍事的介入は日本人女性の日本人男性の抑圧からの解放、伝統的家父長的規範からの解放と読み替えられ、アメリカの戦時中の攻撃によって壊滅状態にあった当時の日本は「回復可能な場」として表象された。これはブッシュ政権が展開したイラクの「自由解放作戦」とも共通する。「超可視化」の問題は占領下の日本の表象にも共通するのである。

更に、アメリカが負けたヴェトナム戦争の場合、ヴェトナム人女性の表象の機能はより複雑であると述べた。敗北の事

実(とそのイメージ)をアメリカ側は改変しなければならなかったからである。メディアは、アメリカにきたヴェトナム人難民を女性化 (feminized) することで、ヴェトナム戦争を「良い戦争」として、アメリカの勝利の戦争に変容させることに成功した。例えば、「ヴェトナムにおいて貧しかった少女がアメリカに移住することで、専門職をもった大人の女性として自立する」という言説は、今や「慣れ親しまれた」ものである。

最後に教授は、アメリカ政府・メディアによる「現地アジア人女性の救済」の物語(言説)について、フェミニスト的視座から分析する必要性を再度強調した。そして社会変革 (social transformation) について重層的に考えるべきであり、「女性の解放」という大義、アメリカの超権力のロジックに陥ることなく、対抗していく道を模索すべきだと締めくくった。

報告後はフロアとの活発な質疑応答がなされた。アジア人以外の第二次世界大戦下におけるヨーロッパ人、敵国であったドイツ人女性の表象について。女性が表象される際の年齢、子供の表象について。また、朝鮮戦争などその他のアジア近代戦争における表象、現地男性のマスキュリティの表象について、難民の当事者性 (agency) の問題など、多岐に渡る重要な指摘と討論がなされたが、ここでは割愛させて頂く。

本研究会は、エスピリテュ教授の最新の論考を拝聴する貴重な機会であった。メディアにおける女性表象と政治権力の問題について、いかに関与すべきか。言説・表象レベルを超えて現代政治の問題へと切り込む「アジア系アメリカ人フェミニスト」であるエスピリテュ教授の今後の研究が、多いに期待される。

(だいまるや みゆき:お茶の水女子大学大学院)

ⁱ 邦訳は執筆者による。

ⁱⁱ Yoneyama, Lisa. "Liberation under Siege: U.S. Military Occupation and Japanese Women's Enfranchisement." *American Quarterly* 57.3 (Sept. 2005): 885-910.

「移動」と「帝国」から描く アメリカ史

ポール・クレイマー セミナー参加記
大鳥 由香子



2011年7月27日CPASセミナーにて

2011年7月27日、ヴァンダービルト大学歴史学部のポール・クレイマー准教授をお迎えし、CPASセミナー（“We are here because you were there: migration and empire in U.S. global histories”）が開催された。クレイマー氏は、現在構想中の米国の移民政策と帝国政治の連関に関する著作で用いられる方法論について報告された。前著において米国のフィリピン進出と「人種」のポリティックスが交接する歴史の諸相を精緻に描き出された氏は現在、その関心を米国の「帝国（empire）」的システムの展開とそれに伴う人々の「移動（migration）」に向けられている。これは、人々の移動の足跡から「アメリカ」という領域をひろく捉えようとする意欲的な試みである。

その試みの切り口となるのが、「移動」と「帝国」という2つの分析概念である。ここで、「移動」という言葉は「移民（immigration）」に代わるものとして用いられている。これはアメリカを取り巻く人々の動きの多方向性を加味するという点で、「移動」の方がより適切であるためという。また、領土獲得を出発点とする狭義の「帝国」は人々の「移動」の歴史をたどるには不十分である。クレイマー氏は現在のところ、「帝国」を社会の秩序を維持する力に依拠する政体、またヒエラルキーや社会的規律の再構築を伴うその形成と位置付けている。このような「帝国」理解は、植民地の獲得・拡大に専心した列強諸国と米国の比較を容易

にする。

なお、既存のアメリカ史研究において「移動」と「帝国」という概念が結び付かなかったのには、クレイマー氏によると次のような6つの理由があげられる。①外交史と移民史の方法論上の不整合、②いわゆる新移民を主な研究対象とする移民史研究の伝統、また新移民の米国移住の経験と米国の帝國的進出の歴史の乖離、③移住者の自由意志を重視する移民史研究の傾向、④米国を「帝国」と見なすことに対する米国社会の強い拒否感、⑤19世紀の北米大陸各地への植民史における「フロンティア」の言説の影響力、⑥ヒトの自由な移動を推奨する近年のグローバリゼーションの言説の影響である。

だが、「移動」と「帝国」を交差させる試みはアメリカ史研究において決して新しいものではない。1965年の移民法改正以降の動きを反映したラテンアメリカおよびアジア系移民の研究は、この2つの観点を内包し、米国への移民送出国の変遷と米国のグローバル・パワーとしての展開の地政学上の重なりを明らかにしてきた。また、移動する人々と静止する境界という前提に挑戦し、移民史の記述にアメリカの帝国主義的拡大の諸側面を織り込んできた。

さて、クレイマー氏は、アメリカという帝国システムを縁取る人々の移動の歴史を、「移動」と「帝国」の概念を結び付ける8つのロジックから議論することを目指しているという。それらは、①侵略（conquest/ invasion）、②強制移住（dislocation）、③労働力移動（exploitation）、④アメリカ的システムの伝播（diffusion）、⑤移民政策の正当性（legitimacy）、⑥アメリカへの親近感の創出（intimacy）、⑦救出（rescue）、⑧敵対（enmity）である。

さらに氏は、各ロジックについて具体例を交えて説明された。①侵略は、ヨーロッパ系移民による北米大陸への植民から米軍主導の海外進出までを一貫して説明しうる。これらは、既存の「帝国」を外部に拡張していく流れに乗っ取った動きである。②強制移住は、戦争や農地の転用、米軍基地建設、社会基盤の整備な

どに起因する人々の移動である。③労働力移動には、政府による労働市場の規制、それにもとづく出稼ぎ労働者の受け入れや海外の安い労働力の利用、頭脳の流入が含まれる。④伝播とは、アメリカの社会システムに慣れ親しんだエリート層の形成を目指す組織的な営為をさす。留学生の受け入れがその好例である。⑤移民政策は一般に国内問題として議論されるが、各国が米国の政治体制の正当性を判断する窓口ともなり、国際世論と無縁ではない。⑥アメリカという帝国システムを巡る人々のネットワークもまた重要である。宣教師と学生、米軍兵士と戦争花嫁など、人種の境界を越え、個人的な信頼や縁故を頼りに渡米した者も多い。⑦救出とは、米国の外交政策に基づく米国本土への難民の受け入れをさす。このロジックにおいて、移民政策と帝国政治の結びつきは最も明確である。⑧敵対とは、人種やイデオロギーを利用し、アメリカの「敵」を排除する試みをさす。その最も極端な形態が、第二次大戦下の日系人収容であった。

氏も指摘されたように、これらのロジックの働きは人々の移動の実体験において重複していることも多い。そして、歴史研究においてこれらを再呼応させるといふ氏の大胆な手法は、アメリカ史研究で用いられる様々な分析概念についての再考を促すことになるのではないかと。また、人々の「移動」を把握するということが「帝国」形成の歴史の枠内にどのように位置づけられるのかといった多くの問いを提起するだろう。今後の研究の進展を楽しみに待ちたい。

（おおとり ゆかこ：東京大学大学院）

Signs of Home: The Paintings and Wartime Diary of Kamekichi Tokita

バーバラ・ジョンズ セミナー参加記
野村 奈央

In the lecture delivered at the Center for Pacific and American Studies at the University of Tokyo on November 29, 2011, Ms. Barbara Johns portrayed a vivid account of an Issei artist, Kamekichi Tokita through the analysis of his paintings and wartime diary. Johns is an

art historian, independent curator, museum consultant, and the former chief curator of the Tacoma Art Museum. The lecture was drawn from her most recent book, *Signs of Home: The Paintings and Wartime Diary of Kamekichi Tokita*, which was published by the University of Washington Press in September 2011. As Johns stated at the beginning of her lecture, this is “new work” in the United States—Tokita and other Issei artists are little known in Tokita’s adopted hometown of Seattle, let alone in Japan. With many illuminating slides of his paintings and contemporary photographs as well as his diary entries, a personal history of a Japanese American



2011年11月29日CPASセミナーにて

artist unfolded in front of the audience that included several of Tokita’s family members in Japan.

Her encounter with Tokita’s painting and his family goes back to the 1980s while working at the Seattle Art Museum. There are only about 40 paintings by Tokita in existence; six of which are housed in the Museum collection and the rest remain in family possession. During her research on Tokita’s paintings, she met Tokita’s oldest son who later shared with her the Japanese translation of the diary that Tokita kept during the wartime. Her encounter with the paintings and the diary led her to further explore the subject, which resulted in the form of exhibition and publication of *Signs of Home*.

Kamekichi Tokita was born to a middle-class merchant family in Shizuoka in 1897. His father expected him to follow his business and sent him to China and

Manchuria. In spite of the intention of his father, he took up traditional Chinese ink painting and calligraphy there. Hoping that Tokita would give up his enthusiasm for art, his father sent him to the United States. He arrived in Seattle on December 2, 1919, in the midst of anti-Japanese racism due to the large immigrant population on West Coast. As he settled in the Nihonmachi, a Japanese American community in Seattle, he eventually met other Issei artists including Kenjiro Nomura, who introduced Western oil painting to Tokita. Nomura also became a business mentor to Tokita when he joined Nomura’s sign business (Noto Sign Company) in 1928.

The sign shop functioned as their painting studio and they spent weekends together with other Nikkei painters through the 1930s. Noto Sign Company closed in 1936 and Tokita bought the management business of the Cadillac Hotel to support his family while pursuing the sign-painting business by himself.

Tokita was active in the Seattle’s art scene in the 1920s and 30s while he made living as a sign painter and hotel manager. He began exhibiting in the Nihonmachi in the mid-1920s and entered into the mainstream in a 1928 exhibition, the *First Northwest Independent Salon*. Tokita’s artistic talent was recognized by gallery curators and directors in the Seattle area. During the depression, Tokita and Nomura were selected for the federal Public Works of Art Project (PWAP) as only Nikkei artists from Washington State. However, his commitment to art declined by the late 1930s when he became more involved in his hotel business to support the family. There are no existing artwork from the late 1930s and early 1940s. Instead, his diary eloquently documented the complex feelings that Tokita underwent during the wartime.

When the U.S. entered the war after Japan’s bombing of Pearl Harbor on

December 7, 1941, he began a diary. Two thirds of his 450 pages-long diary was written between the day of the Pearl Harbor bombing and May 1, 1942, when he and his family were removed to the Puyallup Assembly Center, Washington. He kept the diary intermittently between the time they were relocated to the Minidoka Relocation Center, Idaho, in August 1942 and July 1945. He not only expressed his personal feelings toward the social instability of the time, but also filed newspaper clippings about the war. He produced few paintings and sketches during and after the war years and never fully participated in the art community again.

Tokita’s paintings and diary are both invaluable documentation and resources that illustrate an important facet of Japanese American history. Johns analyzes Tokita’s work as paintings of “intimacy” and “familiarity” of detail and place—she pointed out that his paintings vividly capture Seattle from the perspectives of an Issei, particularly the urban landscape of his neighborhoods in detail. She further interpreted his work as paintings of “transition” and “threshold to a new culture” in which Tokita brought in his Japanese cultural heritage in order to depict his everyday life in a new hometown, Seattle. Tokita’s artistic creativity was a reflection of not only his cultural heritage, but also his deep understanding of Western painting. His paintings serve as visual evidence of a life of Japanese immigrants of the early twentieth century who struggled between two cultures. In contrast to his colorful paintings that reflect his vibrant surroundings, his diary expresses his despair toward the unstable social conditions, particularly that of the early war years. At the end of her lecture, Johns shared some of his diary entries with the audience to ask how we would interpret it. Just as his paintings offer multiple ways for interpretation, his diary, too, suggest many possibilities to explore Japanese American history in prior to and during World War II.

I was thrilled to attend Ms. Johns' lecture because I had been interested in Issei artists since I saw Kenjiro Nomura's landscape painting at a traveling exhibition "1934: A New Deal for Artists" at the Smithsonian American Art Museum in 2009. His name always remained in the back of my head as I had never known Issei artists from this period. It was an intriguing lecture that encouraged us to think about the history of Japanese immigrants from new perspectives. Her thorough analysis of the paintings with careful attention to colors and composition reaffirmed the importance of details when looking at material culture such as paintings as I deal with objects for my own research.

(のむら なお：東京大学大学院)

分裂したままの国家—オバマ政権下での人種と政治

ロジャース・スミス セミナー参加記
石川 葉菜



2011年12月16日アメリカ政治研究会セミナーにて (CPAS共催)

2011年12月16日、アメリカ太平洋地域研究センターに於いて、ペンシルヴァニア大学のロジャース・スミス (Rogers Smith) 教授を招いて、“Still a House Divided: Race and Politics in Obama's America.”と題するセ

ミナーが開催された。本セミナーはアメリカ政治研究会と「基盤研究 (B) アメリカ保守主義レジームの成立・展開とグローバル化の関連をめぐる総合的研究」(代表：古矢旬)との共催でおこなわれた。

本セミナーでスミス教授は、2011年9月に刊行した本セミナーの題目と同名のタイトルの著作の内容について、明快に論じた。ちなみにこの著作は、去る2007年アメリカ政治研究会との共催でCPASにおいて開催されたセミナーに招かれたオックスフォード大学のデズモンド・キング (Desmond King) 教授との共著である。以下ではまず、スミス教授の報告の概略を紹介する。

アメリカは建国して以来現代まで、人種政治において鋭く対立する連合が、時期により特徴を変えながら、存在し続けている。第一期は、憲法が制定された1789年から南北戦争が始まる直前の1860年までである。このときの対立は、奴隷制支持派と、奴隷制反対派によるものだった。これらの連合は、政党や地域、社会階級と重なるものではなかった。第二期は、プレッシー対ファーガソンの最高裁判決で「分離すれども平等」としてジム・クロー法を容認した1896年から、それを否定した最高裁判決が出た1954年までの期間である。この時期は、人種隔離を支持する南部の保守的な民主党員、保守的な共和党員などと、人種隔離に反対するリベラルな共和党員、リベラルな北部の民主党員、黒人などとの間の対立であった。これら第一、二期において共通しているのは、どちらの時期のどちらの連合も、その時代の二大政党間の対立と重なり合っていないことである。

ところが、1978年以降から現代までのアメリカの人種政治においては、二つの連合の対立は政党支持と重なり合うようになった。一方の陣営は「人種を意識しない (color-blind)」政策的立場の人々である。彼らは政府ができる限り人種に関心をもたないことを望む。もう一方の陣営は「人種を意識する (race-conscious)」

政策的立場の人々である。彼らは、具体的な人種の不平等を減らす政策が必要であり、時には人種に焦点を当てた政策も不可欠であると考えている。現在のところ、前者の集団の多くが共和党に、後者の集団の多くが民主党に対して帰属意識をもっているため、こうした政党と連動した人種政策についての対立が、現代アメリカ政治における分極化の一因となっているのである。

こうした政治情勢の中で生まれた黒人初の大統領であるオバマ大統領の、人種政治における立場は非常に興味深い。現在のところ、彼は国家の一致団結を目標に掲げ、意識的に「人種を意識しない (color-blind)」政策を前面に押し出している。しかしその一方で、目立たない形で、政策を選んで「人種を意識する (race-conscious)」立場で限定的ながらも人種に焦点を当てた政策を執り行っているのである。

報告後の討議では、オバマ大統領の折衷的な政治的立場に対する両陣営の反応、大統領選挙におけるヒスパニック票の行方、いくつかの州で導入された投票所における写真付きIDカードによる本人確認の影響、予備選挙の動向など、現在のアメリカ政治に関わる事柄に、特に議論が集中した。それぞれの質問に対し、スミス教授は報告を補足する形で議論を広げ、白熱した質疑応答となった。

本セミナーは、2012年の大統領選挙を控え、共和党予備選挙キャンペーンが熱を帯びている中での開催となった。初の黒人大統領としてオバマ政権が発足して約4年がたち、アメリカにおける人種問題を再検討するのに非常に良い機会であった。現在進行形の現象を歴史的視座にたって捉え、明らかにすることは研究者にとり非常に重要である一方で、非常に困難な作業である。スミス教授は、オバマ政権を取り巻く政治情勢について、実に見事にその課題を成し遂げたといえよう。

(いしかわ はな：東京大学大学院)

センタープロジェクト紹介

基盤研究 (A)

「19世紀前半のアメリカ合衆国における市民編成原理の研究」

研究代表者
遠藤 泰生

「鉄の檻」。言うまでもなくこれは、資本主義の倫理を内在化させた合衆国市民社会の姿を形容するのに『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1920)においてマックス・ウェーバーが用いた言葉である。それにちなみ、多文化主義の歴史家として知られたロナルド・タカキも、19世紀合衆国における市民社会の編成原理を分析した自らの著作を『鉄の檻 (Iron Cage)』(1982)と題した。もちろん、ウェーバーとタカキとは指摘する「檻」の構造に根本的な違いがある。しかし、自由と平等を標榜したはずの合衆国における市民社会を、時代も専門も異なる2人の研究者が「檻」という暴力的な規制を連想させる言葉で揃って形容した事実は、通念的な合衆国史像の見直しを求める何らかの構造が合衆国の市民社会に存在することを示唆する。

同化を強要するこうした内的規制が市民社会に存在することは、広大な領土を擁する移民国家合衆国の宿命であるのかもしれない。そもそも、独立建国により共和制を実現し、合衆国憲法によって三権分立、主権在民などの政治原理を担保した合衆国においては、19世紀を通して、理念あるいは組織としての国家が安定的に維持された。ただ、西への領土の拡張と不断の移民の流入、さらには、資本主義社会の急激な成長に見舞われた19世紀合衆国の市民の実体は、これとは真逆の激しい変化にさらされた。とくに19世紀前半においては、強大な中央集権国家の誕生を嫌悪する革命以来の伝統のもと、自律度の高い独立した地域社会の多様性を許容する連邦制の枠内での成長を、合衆国の市民社会は余儀なくされた。

このことは、市民社会の編成原理をめぐり、時代ごと、地域社会ごとに異なるアクターが争い合う、重層的な権力構造が合衆国に存在したことを示唆する。もとより市民社会の意味自体が多義的であ

る以上、政党や自発的結社、宗教諸派の活動、印刷出版等を介して展開された市民社会の編成原理をめぐる闘いも複雑さを極めた。その歴史を定式化する試みはもちろん既に幾つかのめざましい成果を挙げている。例えば、コミュニティー構成員内の平等と均質を志向する共和主義的価値観と人種民族の属性を護る価値観との相克に合衆国の市民編成原理の歴史を集約させた、政治史家ロジャー・スミスの古典 *Civic Ideals* (1997) の刊行以来、平等と差別、包摂と排斥を表裏とするアメリカニズムの展開をたどる研究は格段の深化をみせている。ただ、本研究の企図を際立たせるために強調するならば、既存の研究は奴隷制度史研究、移民史研究、女性史研究、労働史研究など、個別研究領域内における自由と平等の達成をテーマに綴られる傾向がどうしても強い。その結果、大局的に見れば、一定の時差を保ちながら自由を基軸に諸集団が順々に市民としての権利を獲得していく歴史として、19世紀市民社会の歴史は描かれることが多い。本研究では、そうした市民社会の編成原理をめぐる諸々のせめぎ合いを領域横断的に関連付け、その結節原理を析出することに第一の目的をおく。その際、植民地時代と20世紀転換期を含めた通時的視野からの歴史理解と、中南米やアジアにおける市民社会の編成原理との相違を意識した越境的視野からの歴史理解を深めることにも注意を払う。

以上の了解のもと、2012年1月8日に第一回の研究会を東京大学アメリカ太平洋地域研究センターで開いた。関西アメリカ史研究会を中心に常松洋、肥後本芳男、中野耕太郎の3名により編集された『アメリカ史のフロンティア I アメリカ合衆国の形成と政治文化：建国から第一次世界大戦まで』(昭和堂、2010)を合評することが研究会の主旨であった。遠藤泰生(東京大)、橋川健竜(東京大)の短評に肥後本芳男(同志社大)、中野耕太郎(大阪大)の編者2名が答える形で進められた議論は、「政治文化」をめぐるアメリカ史研究の現況をめぐり縦横の広がりを見せた。その際、研究テーマとしての文

化への着目と研究手法としての文化への着目の違いに議論が集まったことを一つ記しておく。2月以降、19世紀アポリシニズムを環大西洋を文脈に研究するChris Dixon (AU, The University of Queensland) 他を研究会に招聘し、今後の研究の展開に必要な視座をより明確にしていく計画である。

基盤研究 (B)

アメリカ保守主義レジームの成立・展開とグローバル化の関連をめぐる総合的研究

研究代表者
古矢 旬

本研究は、1980年代以降のアメリカの保守優位政治システムのもとで、「保守とリベラル」のイデオロギー対立がアメリカ・デモクラシーにもたらす影響を、歴史的パースペクティブと国際比較をとおして検討することを課題としている。この課題の追求は、2010年中間選挙の前後からアメリカ政治のイデオロギー的膠着状態 (the politics of immobilism) が、ますます亢進してゆく現状の中で、重要性と緊急性を増しているように思われる。この状況をもたらしている最大の要因は、いうまでもなくティーパーティー運動の台頭にある。2008年のリーマン・ブラザーズ破綻に起因する経済危機が長期化する一方で、オバマ政権の危機脱出策が巨大な財政赤字を生むにいたったことが、この新自由主義に基づく「小さな政府」論の発作にも似た噴出の原因であろう。2010年中間選挙における下院民主党の壊滅的敗北の一因となったティーパーティー運動は、その後議会共和党をさらにかたくなな反オバマ、反リベラルの方向へとおしやり、2012年大統領選挙を前にして共和党の予備選はあたかもいずれの候補者がティーパーティーの支持を確保できるかといったいわば「保守度」の競い合いに終始している観がある。他方、2011年秋以降には、ティーパーティー運動とはまったく対照的に、格差解消をスローガンにウォールストリート占拠を敢行した反・新自由主義的大衆運動の勃興も見ら

れた。「保守」と「リベラル」の非和解的対立は、草の根政治をも分断しつつあるのが現状である。そしてこの状況は、議会における党派間の交渉・妥協をいっそう困難にし、そのためオバマ政権の危機対処策も進展が遅れるという悪循環が生じている。次年度以降も引き続き、こうした事態を的確に捉えるための理論構築と並行して、現状の観察・分析がますます必要な課題となるものと思われる。

本年度、本研究は課題をとりまく以上のような新しい事態の展開を視野に入れながら、研究の枠組みと全体的な方向性の確定作業を進めてきた。数名の研究分担者による合衆国現地視察を実施するとともに、来日した海外の研究協力者との意見交換および研究会、ワークショップを開催した。主な研究会活動は以下の通りである。

○2011年7月28日、第4回ヘボン=渋沢記念講座シンポジウム『アメリカ保守主義の現在：ティーパーティー、知識人、そして共和党』への参加。

報告者：Michael Kazin (Georgetown University)、渡辺靖 (慶應義塾大学)、古矢旬 (東京大学)

場 所：東京大学法学部

○2011年11月26日、東京大学法学部政治史研究会

報告者：古矢旬
テーマ：「マッカーシイズム再考」
場 所：東京大学法学部

○2011年12月15日、アメリカ政治研究会報告「アメリカ研究の現在」

報告者：久保文明 (東京大学)、倉科一希 (国際教養大学)、古矢旬 (東京大学)

場 所：東京大学駒場キャンパス18号館
メディアラボ

○2011年12月16日、アメリカ政治研究会
報告者：Rogers Smith (University of Pennsylvania)
報告論題：“Still a House Divided: Race and Politics in Obama’s America”

場 所：東京大学駒場キャンパス14号館208会議室

○2012年1月22日、新学術領域「ユーラシアの地域大国」第4班、国際ワークショップ「脱植民地化と帝国」
報告者・討論者：

Rob Kroes (University of Amsterdam)、木畑洋一 (成城大学)、菅英輝 (西南女学院大学)、古矢旬 (東京大学) 他

なお、本研究は研究代表者の移籍のため、来年度よりは拠点をCPASから北海道商科大学に移すことになる。これまで、本研究を支えてくれた助教の宮田智之さん、機関研究員の福島啓之さん、RAの大学院生の方々、CPAS図書館の司書の方々、事務的に多々ご迷惑をおかけした灰塚毅弘さん、アドミニ棟の研究支援課の皆様にも深くお礼申し上げたい。

基盤研究 (C)

トマス・ポーノルの18世紀北米体験と『植民地統治論』の形成

研究代表者
橋川 健竜

本研究はマサチューセッツ植民地総督を経てイギリス本国の庶民院 (下院) 議員を務めたトマス・ポーノル (1722～

1805年) を取り上げ、1750年代から60年代初めの彼の北米での経験と、その著作、特に『植民地統治論 (The Administration of the Colonies)』(初版1764年、計5版) について検討する。研究初年度にあたる本年度は、ポーノルに関する伝記的事実の把握と、主要史資料の収集を行っている。基礎史料として不可欠な『植民地統治論』第1～5版、またポーノルが先住民や帝国の統治について多くの書簡を交わしたサー・ウィリアム・ジョンソンおよびカドワラダー・コールドデンの全集の入手も進めている。

研究文献については、フレンチ・アンド・インディアン戦争にかけてのイロコイ族の文化変容に関するジェンダー分析 (Gail MacLeitch, *Imperial Entanglements* (2011))、また名誉革命期以降の帝国構造をめぐる思想史研究 (Craig Yirush, *Settlers, Liberty, and Empire* (2011)) など、18世紀中葉の先住民-入植者関係史、およびブリテン帝国統治をめぐる思想史・政治史を中心に収集し、CPAS図書室蔵書として公開している。来年度前期にかけて、史料に加えてこれらの研究を読む作業を続ける。また、2012年3月に最初の海外史料調査を行うべく準備している (米国ハンテントン図書館を予定)。なお、近年の研究誌上ではアメリカ革命期の政治パンフレットの法制史・政治思想史解釈に新しい動きが見られる (*William and Mary Quarterly* 第68巻4号 (2011年10月) 上のエリック・ネルソンの論考と、それをめぐるゴードン・ウッドやポーリン・メイアらの討論など)。それらと本研究の接点にも注意を払うことにしたい。

2011年度（平成23年度）活動報告

I. 研究セミナー

テーマ	講師（所属機関）	司会	期日	主催者	共催者
The China Card: Sino-American Relations and the Origins of the Pacific War	Sidney Pash (Fayetteville State University/ 東京大学フル ブライツ招聘講師)	遠藤泰生	2011.4.19	CPAS	アメリカ学会
Asian American Feminist Critique of the "War on Terror"	Yen Espiritu (University of California, San Diego)	遠藤泰生	2011.6.21	基盤研究 (A) 「デ ニズンシップ: 非 永住・非同化型広 域移民の国際比較 研究」、CPAS	アメリカ学会
The Forgotten History of Chinese Aboriginal Relations in North America	Henry Yu (The University of British Columbia)	遠藤泰生	2011.6.27	基盤研究 (A) 「デ ニズンシップ: 非 永住・非同化型広 域移民の国際比較 研究」、CPAS	アメリカ学会
We Are Here Because You Were There: Migration and Empire in U.S. Global Histories	Paul A. Kramer (Vanderbilt University)	矢口祐人	2011.7.27	CPAS	国際ジャーナリ ズム寄付講座、 アメリカ学会
Signs of Home: The Paintings and Wartime Diary of Kamekichi Tokita	Barbara Johns (タコマ美術館前学芸課長)	矢口祐人	2011.11.29	国際ジャーナリ ズム寄付講座、 CPAS	アメリカ学会
Still a House Divided: Race and Politics in Obama's America	Rogers Smith (University of Pennsylvania)	久保文明	2011.12.16	アメリカ政治研究会	基盤研究 (B) 「ア メリカ保守主義 レジームの成立・ 展開とグローバ ル化の関連を めぐる総合的研 究」、CPAS、ア メリカ学会
Phantom Dwelling: A Discussion of Judith Wright's Late Style	Anne Collett (University of Wollongong/ 東京大学ア メリカ太平洋地域研究センター客員教授)	古矢 旬	2012.1.18	CPAS	
An International Aspect of Antebellum African-American Activism: Black Americans, Haiti, and the Origins of Black Nationalism	Chris Dixon (The University of Queensland)	遠藤泰生	2012.2.6	基盤研究 (A) 「19世 紀前半のアメリカ合 衆国における市民編 成原理の研究」	CPAS、アメリ カ学会
Abolitionism and Gender Reform: Radical Abolitionists' Search for Marital Equality in Antebellum America	Chris Dixon (The University of Queensland)	遠藤泰生	2012.2.9	基盤研究 (A) 「19世 紀前半のアメリカ合 衆国における市民編 成原理の研究」	CPAS、アメリ カ学会
This Tender Speech of the Flower: Judith Wright and Kathleen McArthur	Anne Collett (University of Wollongong/ 東京大学ア メリカ太平洋地域研究センター客員教授)	永野隆行 有満保江	2012.3.6	オーストラリア学会	CPAS

II. シンポジウム等

・シンポジウム「移民・難民・市民権——環太平洋地域における国際移民」

日時：2011年6月25日（土）13時半～17時

場所：東京大学駒場キャンパス18号館1階ホール

開会の挨拶：古矢旬

（東京大学大学院総合文化研究科グロー
バル地域研究機構長/CPASセンター長）

司会：遠藤泰生

（東京大学大学院教授）

報告：Henry Yu

（ブリティッシュ・コロンビア大学准教授）

“The Shifting History of Migration and
Citizenship in the Making of Trans-Pacific
Canada”

Yen Espiritu

（カリフォルニア大学サンディエゴ校教授）

“Militarized Refuge: U.S. Militarism in the
Philippines, Guam, and Vietnam”

柏崎千佳子

（慶應義塾大学准教授）

「象徴的エスニシティの難しさ—比較の視
点からみた日本の移民・同化・市民権」

山下晋司

（東京大学大学院教授）

「一つの世界とともに生きることを学ぶ—
滞日外国人と多文化共生」

討議者：Baden Offord

（東京大学大学院オーストラリア研究客員教授）

大津留（北川）智恵子

（関西大学教授）

閉会の挨拶：高橋均

（東京大学大学院教授）

主催：日本学術振興会科学研究費補助金

基盤研究 (A) 「デニズンシップ：非永住・非
同化型広域移民の国際比較研究」

東京大学大学院総合文化研究科附属グローバ
ル地域研究機構

共催：東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究
専攻

・新学術領域研究第4班国際ワークショップ「脱植
民地化と帝国」

日時：2012年1月22日（日）13時～18時

場所：東京大学駒場キャンパス18号館コラボラ
ションルーム1

イントロダクション 秋田茂 (大阪大学)

第1セッション: 脱植民地化と南アジア (インド)
ムリドゥラ・ムカジー (ネルー大学)

Picking up the Pieces: The Fractured
Legacy of Empire

討論: 栗屋利江 (東京外国語大学)

アディティア・ムカジー (ネルー大学)

The When and How of Decolonisation in India

討論: 木畑洋一 (成城大学)

第2セッション: 脱植民地化と記憶

マリア・ミスラ (オックスフォード大学)

Memory and the Raj in Post-Colonial India

討論: 本田毅彦 (帝京大学)

第3セッション: 米国と脱植民地化

チャーン・ジャイ (オーバーン・モントゴメリー大学)

The Sino-Soviet competition in the Third
World in the late 1950s and early 1960s

討論: 菅英輝 (西南女学院大学)

ロブ・クルース (アムステルダム大学)

Empire and Re-Colonization? The Bush and
Obama Administrations Compared

討論: 古矢旬 (東京大学)

総合討論

Ⅲ. 研究報告等

・研究報告「ジョージ・ウォレスとアメリカ政治の変容」

日時: 2012年3月9日 (金) 15時~17時

場所: 東京大学駒場キャンパス14号館2階208号室

報告: 古矢旬

(東京大学大学院総合文化研究科グローバル
地域研究機構長/CPASセンター長)

Ⅳ. 研究プロジェクト

・日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (A)
「19世紀前半のアメリカ合衆国における市民編成
原理の研究」(代表: 遠藤泰生)

・日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (B)
「アメリカ保守主義レジームの成立・展開とグロー
バル化の関連をめぐり総合的研究」(代表: 古矢旬)

・日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C)
「トマス・ボーンホルの18世紀北米体験と『植民地
統治論』の形成」(代表: 橋川健竜)

Ⅴ. 出版活動

・『CPAS Newsletter』Vol.12, No. 1 (2011年9月)、
No. 2 (2012年3月)

・『アメリカ太平洋研究』第12号 (2012年3月)

Ⅵ. センター所属教員の2011 年1月から12月までの研 究活動

古矢旬

[その他の執筆]

・『斎藤先生の政治史』斎藤眞先生追悼集刊行委員
会編『斎藤眞先生追悼集 駒が回り出した』(東
京大学出版会、2011)、182-193頁。

[口頭報告]

・報告「アメリカ研究を世界に開く」、アメリカ政
治研究会、東京大学、2011年12月15日。

・報告「マッカーシズム再考」、東京大学法学部
政治史研究会、東京大学、2011年11月26日。

・報告「戦後アメリカにおける草の根保守の系譜」、
第4回ヘボン=渋沢記念講座シンポジウム『アメリ
カ保守主義の現在: ティーパーティー、知識人、
そして共和党』、東京大学、2011年7月28日。

遠藤泰生

[学術論文]

・「大西洋から太平洋に: グローバル時代における
アメリカ研究の行方」『オデッセウス』第15号
(2010)、1-17頁。

・「共同研究『公共文化の胎動』: その成果と課題」、
科学研究費補助金基盤研究 (A) 成果報告書・遠
藤泰生編『公共文化の胎動: 建国後の合衆国にお
ける植民地社会規範の継承と断絶に関する研究』
(2011)、1-10頁。

・“New Perspectives on American Studies:
Introduction,” *Nanzan Review of American
Studies*, vol. 33, pp. 5-11, 2011.

[その他の執筆]

・「核心を掘み取り語る一斎藤眞先生のお仕事」斎
藤眞先生追悼集刊行委員会編『斎藤眞先生追悼
集 駒が回り出した』(東京大学出版会、2011)、
55-60頁。

・「『歴史と和解—歴史教育の現在』: 東京大学グロー
バル地域研究機構公開シンポジウム報告」『アメリ
カ研究振興会 会報』no. 71 (2011年2月)、2頁。

[学会活動等]

・“American Studies in the Global Age,” Plenary
Session, Nagoya American Studies Summer
Seminar, Chair, at Nanzan University, 2011, July
24.

・Lecture, “From the sea as a desert of water to
the sea of abundance: the development of the
vision of the Pacific Ocean among the Japanese
from the early 17th century to the mid-20th
century”, at the Center for Critical and Cultural
Studies, the University of Queensland (AU),
2011, November 23.

・運営委員 アメリカ学会第45回年次大会、2011年
6月4~5日、東京大学。

・組織および司会 グローバル地域研究機構公開シ
ンポジウム「移民・難民・市民権—環太平洋地域
における国際移民」2011年6月25日、東京大学駒
場キャンパス18号館ホール。

酒井哲哉

[学術論文]

・「核・アジア・近代の超克—1950年代日本政治思
想の一断面」『思想』第1043号、2011年3月号、
7-26頁。

・「東アジアの地域主義構想—近代日本における<國
域>の思想」『社会思想史研究』第35号、2011年、
60-76頁。

[その他の執筆]

・“Review Essay

Explaining the Japanese-German Relationship:
The Appeal and Difficulty” in *Social Science
Japan Journal* vol. 14, issue 1, 2010, (Oxford
University Press), pp.63-67. (*Japan and
Germany: Two Latecomers on the World
Stage, 1890-1945*. Volume I: German
Weltpolitik and the Emergence of Japan as
a Power: 1890-1931; Volume II: Japanese-
German Rapprochement Policy and its Reality:
1931-45; Volume III: Technology, Thought and
Culture—Individuals and Changing Inter-nation
Relations, 1890-1945), edited by Akira Kudō,
Nobuo Tajima and Erich Pauer. Kent, UK:
Global Oriental, 2009. の書評論文)

・「新刊紹介 富田武『戦間期の日ソ関係 一九一七
—一九三七』(岩波書店、2010年) (『日本歴史』
第753号、2011年2月号)、127-129頁。

・「日本政治外交史の神髓: 書評 五百旗頭薫『条約
改正史—法権回復への展望とナショナリズム』(有
斐閣、2010年)」『書斎の窓』第605号、2011年
6月号、58-61頁。

・「書評・酒井一臣『近代日本外交とアジア太平洋
秩序』(昭和三堂、2009年)」『西洋史学』第238号、
2010年、82-83頁。

・「解説」緒方貞子『満州事変 政策の形成過程』(岩
波現代文庫、2011年)、423-434頁。

[学会活動等]

・討論「1920年代の東アジア国際政治におけるソ
連の登場—「革命外交」の虚と実」、2011年度
日本国際政治学会部会15、つくば国際会議場、
2011年11月13日。

橋川健竜

[学会活動等]

・編集代表 日本アメリカ史学会『アメリカ史研究』(1
~9月)。

・編集委員 アメリカ学会 *The Japanese Journal of
American Studies*。

・世話人 アメリカ学会第45回年次大会初期アメリ
カ分科会、東京大学、2011年6月5日。

宮田智之

[口頭報告]

・報告「アメリカにおける非イデオロギー系シンク
タンクの『停滞』」、2011年度日本比較政治学会
研究大会 自由論題報告、北海道大学、2011年6
月18日。

・報告「アメリカにおけるイデオロギー的分極化と
シンクタンク」、USJI研究プロジェクト・セミナー、
東京大学、2011年7月21日。

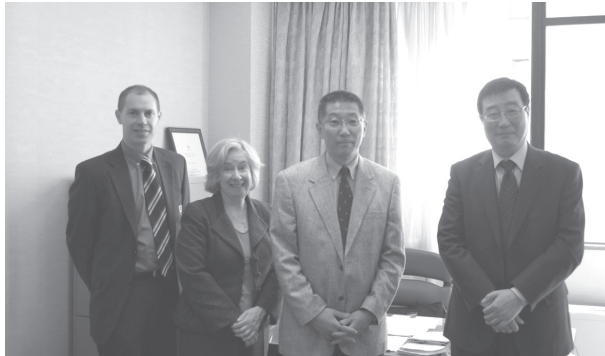
福島啓之

[口頭報告]

・報告「関係修復の国際政治理論—日米同盟と戦後
日本のアジア外交」駒場国際政治ワークショップ、
東京大学、2011年4月28日。

来客の紹介

◆2011年10月4日、クイーンズランド大学のNancy Wright教養学部長一行が来訪されました。



左より、Darren Wise国際連携課長、Nancy Wright 教授・教養学部長、遠藤泰生教授、Ping Chen 教授・中国研究学科副主任

CPASスタッフ紹介

◆研究部門

教授 古矢 旬 (センター長)
 教授 遠藤 泰生 (副センター長)
 教授 酒井 哲哉
 准教授 橋川 健竜
 客員教授 Anne Collett
 研究機関研究員 福島 啓之

◆情報基盤部門

助教 宮田 智之
 司書 横田 睦
 司書 森田 裕美子

◆事務局

専門職員 灰塚 毅弘

新任スタッフの紹介

◆2011年10月1日付けで、Anne Collett客員教授が着任しました。



◆2012年1月1日付けで、森田裕美子司書が着任しました。

グローバル地域研究機構運営委員会 (2011年度) 大学院総合文化研究科・教養学部

(機構長・運営委員長)	古矢 旬	教授
(副研究科長)	石井 洋二郎	教授
(言語情報科学専攻)	生越 直樹	教授
(言語情報科学専攻)	林 文代	教授
(超域文化科学専攻)	菅原 克也	教授
(超域文化科学専攻)	高田 康成	教授
(地域文化研究専攻)	和田 毅	准教授
(国際社会科学専攻)	高橋 直樹	教授
(生命環境科学系)	豊島 陽子	教授
(相関基礎科学系)	岡本 拓司	准教授
(広域システム科学系)	梶田 真	准教授
(機構)	遠藤 泰生	教授
(機構)	酒井 哲哉	教授
(機構)	橋川 健竜	准教授
(機構)	石田 勇治	教授
(機構)	森井 裕一	准教授
(機構)	佐藤 安信	教授
(機構)	丸山 真人	教授
(機構)	遠藤 貢	教授
(機構)	東 大作	准教授
(機構)	山内 昌之	教授
(機構)	森 まり子	特任准教授
(機構)	古田 元夫	教授
(機構)	月脚 達彦	准教授
大学院法學政治学研究所・法学部	北岡 伸一	教授
	西川 洋一	教授
	久保 文明	教授
	寺谷 広司	准教授
大学院人文社会系研究科・文学部	平石 貴樹	教授
	小松 久男	教授
	中村 雄祐	准教授
大学院経済学研究科・経済学部	小野塚 知二	教授
大学院教育学研究科・教育学部	白石 さや	教授
大学院新領域創成科学研究科	中山 幹康	教授
	柳田 辰雄	教授
情報学環・学際情報学府	姜 尚中	教授
東洋文化研究所	長澤 榮治	教授
	佐藤 仁	准教授
		以上38名

CPAS ニュースレター Vol. 12 No. 2

平成24年3月23日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科

グローバル地域研究機構

アメリカ太平洋地域研究センター

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL 03-5454-6137 FAX 03-5454-6160

<http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/>

編集：橋川健竜（編集長） 福島啓之

制作：JTB印刷株式会社

〒171-0031 東京都豊島区目白2-1-1

TEL 03-5950-2731 FAX 03-5979-7022